

Tous les matins du monde

めぐり逢う朝



パスカル・キニャール 高橋啓訳

TOUS LES MATINS DU MONDE

by Pascal Quignard

Copyright © 1991

by Éditions Gallimard

First published 1992 in Japan

by Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan

by arrangement with Éditions Gallimard

through Bureau des Copyrights Français

Tokyo.

検 印

廃 止

めぐり逢う朝

1992年11月20日

初版印刷

1992年11月30日

初版発行

著 者 パスカル・キニャール

訳 者 ^{なか}高 ^{はし}橋 ^{けい}啓

発行者 早 川 浩

発行所 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 東京(3252)3111(大代表)

振替 東京・6-47799

印刷所 株式会社享有堂印刷所

製本所 大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-15-203544-7 C0097

Printed and bound in Japan

めぐり逢う朝

パスカル・キニャール 高橋 啓 訳

早川書房

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1992 Hayakawa Publishing, Inc.

一六五〇年の春、サント・コロンブ氏の奥方はこの世を去った。彼女は二歳と六歳になる二人の娘を残して亡くなった。サント・コロンブ氏は伴侶に先立たれた悲しみから癒えることはなかった。彼は妻を愛していた。彼が〈哀惜の墓^{トング}〉を作曲したのは、この時のことだった。

サント・コロンブ氏は、ビエーヴル川のほとりにある屋敷に娘二人と一緒に

暮らしていた。川に面した裏庭は狭く、川岸まで塀が続いていた。川のほとりには柳の木が立ち並び、岸辺には一艘の小舟がもやってあった。気持ちの良い夕暮れには、サント・コロンブ氏はその小舟に座って時を過ごした。彼は裕福ではなかったが、貧しさを憂うほどではなかった。ベリーにある領地からわずかながら収入があり、ときには自分の家で作った葡萄酒と引き換えに、布地や野禽を手に入れていた。彼は狩猟が苦手だったし、川の流域に鬱蒼と生い茂る森のなかを駆けまわることには嫌悪をおぼえた。そのわずかな収入を補っていたのは、弟子から受け取る謝礼だった。彼は当時ロンドンとパリで大流行していたヴィオールを教えていた。評判の高い名手だった。彼は二人の従僕と子供の世話をする賄い婦を雇っていた。また、ビュール氏というポール・ロワイヤル修道院と関係の深い学士仲間に属する人物が子供たちに読み書き、算術、聖人伝、およびそれを理解するためのラテン語の基礎を教えていた。ビュール氏

はサンリドミニクダンフェール街の袋小路に住まいしていた。このビュール氏をサント・コロンブ氏に紹介したのはボン・カレ夫人だった。

サント・コロンブ氏は、まだ年端もいかないうちから娘たちに読譜と聴音を教えた。娘たちは歌がうまく、音感に優れていた。姉のマドレーヌが九歳になり、妹のトワネットが五歳になったとき、かなり難しい箇所のある三重唱を三人で歌ったことがあったが、娘たちが難なくそれを優美にこなしたので、サント・コロンブ氏はいたく満足した。こうして彼女たちはますます父親似となり、母親の面影を彷彿とさせることはあまりなかったが、サント・コロンブ氏の胸のうちに妻の思い出が薄れることはなかった。五年の歳月が経ても、妻の容姿は彼のまぶたに焼きついていた。彼はいつもむっとりとした顔でおし黙っていた。パリに出かけることも、ジュイに出かけることもなかった。サント・コロンブ夫人の死後二年が経ったとき、彼は愛馬を売った。妻が他界したとき、死

目に会えなかったことがいたたまれない思いとして残っていたからだだった。そのとき彼は、ほんの少しのピュイゼの葡萄酒と音楽を死出の友としたいと願った友人のヴォークラン氏の枕辺にいた。この友人は昼食後、息を引き取った。サント・コロンブ氏がサヴルー氏の馬車で自宅に戻ったときには深夜をまわっていた。妻はすでに正装し、蠟燭と涙にとりかこまれていた。彼はひと言も口をきかず、また誰とも目を合わせなかった。

パリに通ずる道は舗装されていなかったもので、徒歩で市街に出ようとすれば優に二時間はかかる。サント・コロンブ氏は屋敷にひきこもり、音楽に没頭した。彼はひたすらヴィオールの練習にはげみ、すでに押しも押されぬ名手となっていた。妻がこの世を去り、夏が過ぎ、秋が過ぎてゆくあいだ、彼は一日に十五時間も練習することさえあった。彼は裏庭に小屋を建てさせた。その小屋は、シュルリーの時代に植えられた巨大な桑の太い下枝を支えに建てられた。

戸口は階段を四段上がれば達する高さにあった。それは子供たちの勉強や遊びの邪魔をせずに練習するための配慮だった。あるいは、賄い婦のギニョットが二人を寝かせつけた後でも気がねなく練習できるからだだった。彼は娘たちが寝入りばなに闇のなかで交わすおしゃべりにも遠慮したのだった。

彼は従来とは異なり、ヴィオールを膝の上に乗せずに、股の間にはさむ持ち方を考案した。また、低音の弦をもう一本追加して、この楽器により重厚な響きをもたせ、より愁いにみちた演奏を可能にした。さらにまた、弓を人差し指と中指で軽く持つことによって、弓の動きを軽快にし、弦によけいな力を加えないようにも工夫した。これによって彼の弓使いは神技の域に達した。その弟子のひとり、コーム・ル・ブラン（父）は、師はついに人間のあらゆる^{こゝろ}声音をまねることができたと伝えている。若い女のため息から年配の男の鳴咽まで、アンリ・ド・ナヴァールの関^{とま}の声から夢中になって絵をかいている子供の柔ら

かい吐息まで、あるいは欲望をおおりたてるみだらな喘ぎ声から祈りに集中している人のほとんど聞きとれない重々しいつぶやきまで、しかもそれをほんのわずかの単純な和音で再現してみせたという。

サント・コロンプ氏の住まいに通ずる道は、寒くじめじめした季節になると泥でぬかるんだ。彼はパリに嫌悪を抱いていた。舗石のうえでカツカツと鳴り響く木靴の音、ガチャガチャとうるさい拍車の音、馬車の車軸がきしむ音、荷車の鉄具がぶつかり合う音、そのすべてが嫌いだった。彼は偏執的だった。クワガタやコガネムシを燭台の底で押しつぶすこともあった。昆虫の下顎や翅鞘

が金属の台座でじわりじわりと押しつぶされると、いかにも異様な音がした。娘たちもそれを見て喜んだ。ときには自らテントウムシを捕まえて持ってくることさえあった。

とはいえ、彼は冷酷なわけではなかった。ただ感情表現が不器用なだけだった。子供が求める優しい仕草をしてやることができなかった。画家のボージャン氏やランスロ氏をのぞけば、交友を長続きさせる術も知らなかった。サント・コロンブ氏はこのクロード・ランスロとポール・ロワイヤルでの学友であり、ポンリカレ夫人に招かれたときなど、何度か旧交を温めることがあった。容姿について言えば、サント・コロンブ氏は背が高く、痩せぎすで、顔は黄色く、そして物腰はつっけんどんだった。背筋をちゃんと伸ばし、相手をたじろがせてしまうほどじっと目を見据え、口もとをゆるめることはなかった。いつも苦虫を噛みしめているような男だったが、陽気になれないわけではなかった。

彼はしばしば葡萄酒をちびりちびりやりながら、娘たちとカードに興じた。それに毎晩、アルデンヌの土を焼いた長いパイプで煙草を吸った。流行を追うようなことはなかった。彼は戦時のように頭を丸め、外出するときには首のまわりに丸いひだ襟をつけた。若いときには、亡きルイ十三世の拝謁はいえつを賜ったこともあるが、なぜかその拝謁の日以来、ルーヴル宮にもサン・ジェルマンの城にも足を向けることがなくなった。彼は喪服を脱いで、正装することはなかった。

彼はたしかに粗暴で激しやすかったが、優しさをかいま見せることもあった。夜、泣き声が聞こえてくると、燭台を手にも二階に上がり、二人の娘のあいだにひざまずき、歌をうたってやることがあった。

洞窟でひとり生きるマゲダレナ

涙と嘆きが昼も夜も……

と、ラテン語でうたうこともあれば、

かのひとは哀れに死に、われは死者のごとく生き

黄金は

眠る

王がなお賭に興ずる大理石の宮殿で

と、詩の一節を朗唱することもあった。ときおり幼いトワネットが尋ねることがあった。

「お母さんはどんな人だったの？」

すると彼は顔を曇らせるだけで、ひと言もしやべらないのだった。ある日、彼は娘たちに言った。

「良い子にしておいで。しっかり勉強するのだ。おまえたちはいつもよくやっている。とくにマドレーヌは感心だ。おまえたちのお母さんのことは今でも残念に思っている。その思い出のひとつひとつにかけがえない喜びがしまわれているのだよ」

またあるときなど、自分が口下手であることを娘たちに詫びたこともあった。おまえたちの母親はよくしゃべり、よく笑ったものだった。それにひきかえ自分ときたら、言葉への愛着というものがほとんどない。人との交際にも喜びをおぼえない。書物や談話にも関心がないというのだった。実際、ヴォークラン・デ・イヴトーをはじめとする旧友たちの詩ですら、すっかり感服するということはけっしてなかった。彼の交友関係のなかには、ラ・プティティエール氏

という人物もあった。この人物は枢機卿軍の指揮官をつとめたこともある男だったが、そこを辞すると自ら隠士ソリテールとなり、マレ氏（父）の跡を受けて、ポール・ロワイヤル御用達の靴屋になった変わり者だった。

絵画についても、ボージャン氏との交友をのぞけば、事情は同じだった。サント・コロンブ氏は、当時評判をとっていたシャンパーニュ氏の絵を評価しなかった。彼には、その絵が重厚というよりは陰鬱、簡素というよりは貧弱に思えたのだった。建築しかり、彫刻しかり、工芸しかり、そして宗教についても冷淡だった。ただし、相手がポン＝カレ夫人となると話は別だった。実際、夫人はリュートやテオルボをみごとに演奏したし、音楽を神のために犠牲にすることなどできなかった。彼女は音楽のない生活にしぶれを切らすと、ときおりサント・コロンブ氏のもとに馬車を差し向けて彼を自宅に呼び寄せ、目がかすみまでテオルボで伴奏をつとめた。彼女はフランソワ一世の時代にさかのぼる

黒いヴィオールを持っていて、サント・コロンブ氏はそれをエジプトの偶像か何かのように扱った。

彼はわけもなく怒りの発作にとらわれることがあった。怒りが昂じると「ああ！　ああ！」と叫び声をあげながら家具を壊したりするので、娘たちは恐怖におののいた。また、男手ひとつで躰しっけが行き届かないようなことがあつては困ると、娘たちにたいへん口やかましかった。彼は嚴格で、何か落度があると娘たちを必ず罰した。ただし、手を上げたり、鞭を振るったりすることはできなかったので、いきおい倉に閉じこめることになった。そして、閉じこめたままよく忘れた。すると賄い婦のギニョットが助けにやってくるのだった。

マドレーヌはけっして不平をもらさなかった。父親が怒りを爆発させるたびに小舟のように揺れ、そして不意に沈んだ。何も食べようとせず、沈黙のなかにひきこもった。トワネットは父親に反抗し、口応えし、なじった。彼女は成